忌部に伝わるお話

忌部玉の森の話

忌部神社の石段下の南側の田んぼの中に「玉の森」と呼ばれるこんもりと木が茂っている場所がある。その場所は「櫛明玉命」の陵と伝えられており地下荒神とも呼ばれている。

もとは、10メートル四方の饅頭のような形をした小さな森であったが、享保年間の大雨により、3メートル四方の今のような形になったそうである。中央にある古木は、盛衰はあったものの、枯れかけると新芽が出て絶えることなくいつの時代もほとんど大きさを変えることなく生き続けて来たという。

また、「出雲雲陵考」という古記録には、「玉の森」について次のような話が書かれている。

文亀２（１５０２）年国めぐりをしている山伏などの修験者が12月の大晦日に、意宇郡忌部郷忌部村、氏神大宮総社神宮寺へ参りその夜はそこで泊まった。丑の刻《午前2時》と思うが氏神社の麓にある森から大きな火の玉が飛び出し、東の方へ飛び去るのを見た。修験者が驚いて里人にたずねたら、「あの森は昔から玉の森といって毎年の大晦日には火の玉が出るところだ」と言ったそうである。

玉の森より西方忌部神社を望む

〝火の玉〟については、近年でも、大晦日ではないが、夜遅く地区の集会からの帰り道、「玉の森」の木の周りを赤い火の玉のようなものがふわふわと飛んでいるのを見たと言う者がいた。

〝櫛明玉命〟は〝玉祖命〟ともよばれ、出雲国の玉作りの祖神である。

〝天照大神〟が、天岩戸にお隠れになった時、〝天照大神〟に岩戸から出てきていただくためのお祭りをした。その時〝天太玉命〟が元気な枝葉の茂った榊に大きな曲玉を連ねた玉飾りや、大鏡、楮や麻で織った白木綿や青木綿などを垂らして飾った大太玉串を作った。そして、それを捧げ持ち、〝天児屋根命〟が〝天照大神〟の素晴らしさを祝詞に認め奏上したという。その時飾られた曲玉を作ったのが〝櫛明玉命〟である。

〝須佐之男命〟が〝天照大神〟に献上したとされる「八坂瓊曲玉」もそもそもは〝櫛明玉命〟が〝須佐之男命〟に贈ったものであるという。

また「八坂瓊曲玉」は、天孫降臨の時に、〝天照大神〟から〝にぎの命〟に授けられた三種の神器の一つにもなり今に伝えられている。

古代から出雲国で玉作りに携わっていた人々は〝櫛明玉命〟を玉作りの祖神として崇拝した。

現在玉造の玉作湯神社に御祭神として祀られているが、忌部の地でも玉が作られていたにもかかわらず、忌部神社の御祭神にその名前は無い。『玉の森』の陵だけがあるのみである。他に玉作遺跡の近くにある「玉造築山古墳」も〝櫛明玉命〟の墓と伝えられている。

忌部の郷の歴史の中では、その昔、武勇に優れ、郷人からも信頼の厚かった和田才小が「〝櫛明玉命〟は和田家の氏神である」と言ったという話もあるが定かなことではない。

さらに驚くことは、近年〝玉の森〟だけが、忌部外の人の個人の所有地になっていることが分かったのである。いつ頃、誰がどういう理由でそうなったのかなど、経緯は全く分かっていない。神の陵である。なぜ私有地として求められたのか不思議な話である。

各家々では昔から、「勝手に玉の森の木を切ったり、敷地内に入って踏み荒らしたりすうじゃないよ。神聖な場所だけん、何かする時は必ず清めて拝んでもらってからね」「神様が嫌がられるようなことを言ってもいけんでね。祟りがあるといけんけんね」と子ども達に云いきかせているのである。

（和田喜美子）